

平成 22 年度

福岡県移住者子弟留学報告書

2010 Exchange Students Program for
Descendants of Immigrants from Fukuoka Prefecture

C o m p l e t i o n R e p o r t

Fukuoka International Exchange Foundation

財団法人福岡県国際交流センター

目次

02 清水 エステバン 博史 (ブラジル福岡県人会)
九州大学大学院システム情報科学府

05 松延 多美 (ブラジル福岡県人会)
九州産業大学国際文化学部

09 内田 シベリ (ブラジル福岡県人会)
九州産業大学経営学部

13 今村 フィラヴィオ アキラ (ブラジル福岡県人会)
九州産業大学経済学部

16 中村 イアラ 明美 デ アルメイダ (ブラジル福岡県人会)
九州大学法学部

20 緒方 ディアナ おさえ (在ポリビア福岡県人会)
九州産業大学商学部第一部

24 真壁 川原 ヘラルド 幹夫 (ペルー福岡クラブ)
九州産業大学経済学部



ブラジル福岡県人会 清水 エステバン 博史

はじめに

私は22歳の日系2世です。グアテマラで生まれ、1歳になる前に家族と一緒にブラジルへ移り住み、それ以来ずっとサンパウロ市で生活してきました。

平成21年12月にサンパウロ技術大学の情報処理科学を卒業しました。卒業後、勉強を続けたい気持ちと共に、母と祖父母の故郷である福岡を知りたいという気持ちがあったので、福岡での留学に挑戦しました。そして平成22年4月、ついに夢が実現して福岡県移住者子弟留学生として福岡へ来ることができました。九州の名門校である九州大学で専門の研究ができただけではなく、様々な特別な経験をしながら多くの人と触れ合い、日本の心を楽しく学び、貴重な留学生活を送ることができました。

福岡での新しい生活と文化について

福岡での生活はブラジルとは言葉も習慣も違い、最初の頃は緊張の毎日を過ごしました。しかし、福岡は大変住みやすいところだと言われるだけあり、自然が豊かで食べ物も美味しく、公共交通機関が発達していて、どこへ行くにも便利なので次第に新しい生活に慣れて快適に過ごすことができました。

また、全国で福岡県ほど世界中から集まる留学生のためのサポートが万全な県はないと思います。福岡県国際交流センター、福岡県留学生サポートセンター(FISSC)、大学の留学生サポートセンター、そして、私たち留学生にとって家族のような福岡県海外移住家族会。この様々なグループの人たちは、この一年間、私たちが困った時だけではなく、留学期間を有意義なものにするために、私たちを励まし手伝ってくださった心の広い人たちです。彼らのおかげで、この一年間の留学を通して、私は日本の各季節に様々な伝統的な活動や祭りを体験することができました。春には、田植え、博多どんたく、夏には、蛍狩り、花火大会、山笠、ヨット体験、秋には稲刈り、ぶどう狩り、着物体験、ハイキング大会、冬にはクリスマスコンサートなど、全てが心の中に深く残った経験ばかりでした。

このように学校や教科書などで学ぶことが出来ないことを実際に体験し、日本文化と習慣についての知識が広がりました。

夏休みについて

学生生活で一番楽しい時期は夏休みです。私は、夏休みは、福岡だけでなく日本各地を良く知る貴重な機会だと思い、8月の厳しい暑さにもめげずに、青春18切符を使い電車で様々な地方を訪ねる旅に出ました。

初めは、福岡から出発して約13時間で大阪に到着しました。関西地方では、3日間で大阪、京都、奈良、滋賀を観光し、日本は先進国だけれども、伝統的なお寺や神社が多く残っていることがわかりました。また、それは、日本では古くからの日本文化が尊重されている証だからだと私は思います。関西を観光した後、関東へ行き、3年ぶりに日本人の友人に会うことができました。私は、彼らに普段日本人の若者が遊びに行く所へ連れて行ってもらい、とても楽しい時間を過ごしました。短い10日間の旅行でしたが、一気に日本各地の特色を学び、大変満足して福岡へ帰りました。

また、同じ10日間で日本の魅力を知った、海外から来たグループがいます。「平成22年度海外福岡県人会子弟招へい事業」に参加した子どもたちは、7月に福岡を訪ねて来ました。7月の梅雨にもかかわらず、小学校や博物館、お寺やお城を訪問して、子どもたちはとても短い期間に日本はどのような国なのかを知ることができ、一生忘れない日々を過ごして、嬉しそうに帰国しました。彼らはまだ子どもなので、どれだけ自分たちが恵まれているかは分からないと思いますが、将来大人になり、日本へ来ることができたことは、自分の人生でどれだけ重要なことだったのかを理解出来ると思います。

勉強について

私は高校時代からコンピューターや情報技術(IT)と関係ある全てのものに興味があったので、大学では情報処理科学を専攻しました。現在、IT会社のサービスを必要とする企業は世界中に増えています。しかし、我々はこのようにITが発達している時代に生きていても、ソフトウェア開発には、いまだに大変多くの時間と開発者の努力が費やされています。

私は、九州大学の伊都キャンパスで、指導教員である福田晃教授の「ふくダ研究室」で、「ソフトウェア開発手法」というテーマで研究をしました。

研究をするにあたり、研究室の中西恒夫先生にPLUS (Product Line UML Based Software) を紹介されました。簡単にいうと、PLUSは、ソフトウェア開発を容易にし、開発速度を高めることを目的とするソフトウェアです。ソフトウェアを一から開発するより、各ソフトウェアの共通機能などを利用し、他のシステムに適用するというのが、その考え方です。

例えば、現在世界中に使われている携帯電話には、ソフトウェアが入っています。そのソフトウェアは、特別にその携帯モデルのために開発されたというわけではありません。携帯電話に付いている基本的な機能は、ほとんどが既に開発されていた機能を適用しています。その共通機能は、PLUSのアイデアに従い適用されたものなのです。

中西先生のおかげで、PLUSについて理論的に学べただけではなく、実用的に勉強する機会が出来ました。具体的には、私は、PLUSを利用して図書館を管理するシステムを開発しました。その工程では、私が知らなかった様々な新しい技術についての勉強があまりに難しく、一度は諦めようと思いましたが、中西先生に「会社で働き出すと『試行錯誤』はなかなかできないし、失敗も許されなくなります。学生のうちに積極的に『試行錯誤』をやりましょう」という言葉をいただき、続けることができました。

研究の進歩は私の予想以下でしたが、専門的な知識は増えました。これからの私の目標は、PLUSを完全に把握し、その開発手法について修正や改善などを提案することです。

大学では、自分の研究だけではなく、毎週研究室で行われていた「ふくダ研究会」で大学生や大学院生の様々な発表を聞いて、多くの技術的な基礎知識を得ることが出来ました。日本に来たばかりの頃とは違い、今は様々な専門用語が日本語でも分かるようになり、それだけでも大変嬉しく思います。

最後に

日本での留学を通して、自分のルーツである福岡で、大学での研究や日本語の勉強、そして日本文化や習慣について学び、様々な知識を得ることが出来ました。その上、初めて会う親戚に会うこともでき、非常に嬉しく思いました。

また、ブラジル福岡県人会、福岡県国際交流センター、福岡県、家族会の方々に、厚くお礼を申し上げます。大学の先生方や友達にも感謝を申し上げます。皆さま、本当にありがとうございました！「福岡県移住者子弟留学生」としての誇りを持って、1年間の恵まれた留学生活を送ることが出来ました。これからは、この「異文化交流」の大切さを理解した人間として、福岡県や日本のために、福岡とブラジルを結ぶ架け橋になりたいと思っています。



九州大学大学院システム情報科学研究院 教授 中西 恒夫
(清水担当教員)

私の研究室では、清水エステバン博史君を福岡県移住者子弟留学生として、2010年4月から1年間迎えました。

私の研究室では、毎年、配属された学部4回生に、倒立振子型ライントレースカーを題材にソフトウェアモデリング技術と制御技術を競う『ET ロボコン』に参加させています。エステバン君にもチームに加わってもらったのですが、同時期に日本語の講義も随分とあったようで、日本人学生たちと協業する時間をとるのはかなり難しかったようです。後期になってからは、オブジェクト指向のソフトウェア開発方法論を学んでもらい、研究室用のWebベースの図書管理データベースシステムを進めています。英語、日本語の技術資料を読みこなすシステムを作るのは大変なことだと思いますが、最後まで作った暁には研究室で使われ続けるシステムです。ぜひやり遂げてもらいたいと思います。

さまざまなルーツの人々が集まる母国ブラジルとは違って、日本は人、文化、言語にそれほどの多様性がない国です。日本の学生たちはあまり外国の人と付き合うのに慣れていません。もしかしたら、日本の学生たちをよそよそしいと感じることもあったかもしれませんが、彼ら、彼女らは決して排他的なのではなく単にシャイなだけです。日本社会で育った人たちと胸襟を開いて話せるようになるのに、1年という留学期間はあまりに短いのではないかと思います。エステバン君には、是非、さらに2年ほど日本の大学院で学ぶか、会社で働くかして、日本を深くまで知る架け橋人材になって欲しいと思います。



ブラジル福岡県人会 松延 多美

初めに

私はブラジル・サンパウロ州マリリア市出身の日系3世です。マリリア市はサンパウロ市から433km離れた町です。私は6人兄弟の3女で、松延家はとても賑やかな家族です。私の父が天理教の教会長なので、祖父母、両親と一緒に教会に住んでいます。多くの方は教会での生活が理解できないと思いますが、私はそこで生まれ育ったので、普通の家族や家での生活の方があまりわかりません。年中忙しくて、いつも家族以外の人と一緒に住んでいるので大変な事もありますが、多くの人と出会えて、多種多様な経験をできる生活なので、教会で育ったことに本当に感謝しています。

私は3年前にマリリア市エウリピデス総合大学センターの翻訳課程を卒業しました。祖父の故郷である福岡への留学は、大学での勉強だけではなく自分の日系人としてのルーツを知る大切な機会だったと思っています。

新生活

不安や心細さを抱えて日本へ来ました。福岡での新しい生活に慣れるまでは、緊張する毎日、何もかもがスムーズにいかないことばかりでした。言葉の問題だけではなく、習慣や日本人のマナーなども分からずに、失礼なことを言って恥ずかしい思いをしたこともありました。初めのうちは常に疲れていた気がします。しかし、福岡で私と同じ悩みを抱えているかけがえのない友達ができ、お互いに助け合いながらどんなに嫌なことがあっても毎日一緒に笑って過ごしました。

月日が経って日本での生活に慣れ、想像以上に日本を好きになりました。福岡には静かでのんびりできる場所もあれば、都会らしく賑やかな場所もあります。きれいな海や山があり、福岡の食べ物は最高です！時々、日本での生活が夢のような気がして、いつの日か夢から覚めると全然違う場所に居るのではないかと思ったりするぐらい幸せでした。

また、私を含めて7人の福岡県移住者子弟留学生が同じ寮に住めたことは、ありがたいことでした。食事や買い物だけではなく、楽しい時、困った時、悩んでいる時、寂しい時、風邪を引いて寝込んだときなど、皆がいてくれたことにとっても感謝しています。そして、最後まで全員が仲良くいられたことを本当にありがたいと思っています。

九州産業大学 (KSU) & 研究について

私は九州産業大学の国際文化学部で、日本文化学科の山下勉先生の指導で研究をしました。初めは、「言語」についての研究を進めようと思っていましたが、自分が日系人であることや日本に来た意味を考えているうちに、「日本からブラジルに移住した方々の、日本に“残された”ご親戚や移住当時の日本について」というテーマで研究を進めることに決めました。

今年は福岡県人がブラジルへ移住して100周年を迎えました。ブラジルへの日本人の移住は1908年に始まり、全国から約25万人が移住し、福岡県からは約2万5千人が移住しています。国の政策として始まった移民事業ですが、現地での受入態勢が充分でない例も多く、移民ではなく棄民とも言われます。この研究を始めて、多くの日本人が移住についてあまり知らないことに気づ

きました。日本の学校では移住についての勉強をしていないことを知り、少し寂しく感じました。私たち日系人は日本文化の影響を受けて育ち、幼い頃から日本との繋がりを感じています。しかし、日本人は私たちの存在や、ブラジルに現在150万人の日系人が住んでいることを知らないということを残念に思いました。

大学で得た物は、研究だけではありません。私は大学のアーチェリー部に入部しました。部活での生活は人生勉強になりました。日本に住み大学に毎日通っていても、部活に入部しなければ知りえないことがたくさんあります。部活の中での習慣、先輩後輩の関係、男女の言葉遣いの違いなどを知ることができ、いろいろな規則を守っている部活生活は日本文化や習慣を知る上で非常に良い勉強になりました。また、とても優しい先輩たちに囲まれて、アーチェリーの練習はすごく楽しかったです。

大切な思い出

日本へ到着してから毎月様々な楽しい体験をしました。田植え、ホームステイ、大学の熊本県へバスハイクイベント、副知事表敬、子弟招へい事業、ゼミの合宿など、ここには書ききれないほどの活動に、福岡県国際交流センターや福岡県海外移住家族会の方々からお誘いいただき、できるだけ参加しました。私にとっては、どの活動も一つ一つが大切な思い出になっています。

その中でも、一番印象に残っている活動は海外福岡県人会子弟招へい事業に参加したことでした。とても楽しくて忙しい10日間でした。この事業の目的の1つは、子どもたちに自分たちのルーツがある福岡県を知ってもらうことです。私はブラジルの3人の女の子のグループのサポートをしました。この事業を通して多くの人たちと触れ合い、いろいろな活動や珍しい体験に参加をして、子どもたちだけではなく、私も楽しく日本文化や習慣を学ぶことや福岡のことを更に知ることができて福岡が大好きになりました。本当に貴重な機会をいただきました。

最後に

この留学で、大学での勉強以外にも人間として成長したと思います。帰国後、私は日本とブラジル両方に関わる仕事がしたいと思っています。2つの国を少しでも近づけたいと思う気持ちからです。ブラジル福岡県人会のためにも、私ができる事は何でもやりたいです。私が経験した貴重な留学制度を続けてもっと多くの人に経験してもらうために、そしてたくさんの方が私のように福岡を好きになり、福岡とブラジルの繋がりがいつまでも続くように頑張っていきたいと思っています。

ムイト オブリガーダ！

初めに、いつも見守ってくれている神様へ感謝を申し上げます。私のために今まで頑張ってきてくれた両親と、いつも応援し支えてくれる兄弟：いつもありがとうございます。福岡県庁と福岡県国際交流センターの皆様：何十年もこの伝統的な留学を続けてくださってありがとうございます。最初から最後まで私たち留学生のサポートをしてくださり、誠にありがとうございます。ブラジル福岡県人会の皆様：このような貴重なチャンスを与えてくれて心から感謝しています。最初から最後まですごくお世話になりました。ありがとうございました。福岡県海外移住家族会の皆様：様々な素晴らしい活動にお誘いいただき、こんなにも福岡を好きになれたのは皆様のおかげだと思っています。心から感謝を申し上げます。九州産業大学の山下勉先生：先生のおかげで私はこの留学ができました。一年間、ご指導いただき、誠にありがとうございました。部活の先輩方やゼミのお

友達：日本語もしっかり話せない私を最初から快く受け入れてくれて本当にありがとうございました。ホームステイとブドウ狩りでお世話になった臼井さん：優しく私達を自分の家族に受け入れてくれて、暖かさに囲まれた2日間をありがとうございました。2010年度の福岡県移住者子弟留学生：この特別な1年間の生活は終わりましたが、この繋がりが留学と共に終わらないようにと願っています。最高の1年間をありがとう。



九州産業大学国際文化学部 教授 山下 勉
(松延担当教員)

松延多美さんは、ブラジルからの福岡県移住者子弟留学生で、2010年4月から2011年3月まで、九州産業大学国際文化学部研究生として迎えました。

彼女は翻訳課程を卒業しており、研究課題はポルトガル語と日本語・英語間の翻訳能力の上達及びブラジルにおける外国語教育の改善を目指すものでした。彼女は、すでに英語も日本語も日常生活ではほぼ不自由しない程のコミュニケーション能力を持っていますが、日本語初級（久保田先生）、日本文学入門（和田先生）や英語（柿元先生、カーター先生）等多くの講義を積極的に受講し、両語学のさらなるレベルアップに努力しています。

「ゼミナール」では、彼女は持前の明るく真面目な性格と積極的な姿勢で、すぐに日本人学生の中に溶け込みました。発表ではブラジルの教育制度を紹介し、日本とアメリカの制度及び背後の国民性の相違を巡って和やかで活発な議論を展開させてくれました。彼女が参加してくれたことで一層活発で実りあるゼミナールとなりました。

夏休み直後に、テーマを「ブラジル日系人としての“ルーツ探り”」に変更しました。「福岡に滞在しているこの期間でしか出来ないこと、日系3世である自分が出来ること、否自分がやらなければならないこと」との彼女の強い決意に、私もゼミナール生全員も彼女の使命感と生き方に感動し、応援のエールを送っています。

帰国後は、この1年間の留学経験を生かして大いに活躍されることを期待しています。特に研究テーマで見出した「ブラジル日系人としての“ルーツ探り”」を、自らの主体性の中核に、又翻訳や外国語教育等の具体的活動の精神的支柱として生かされるよう期待します。さらに、将来にわたり福岡とブラジルの友好関係をさらに発展する上で、彼女が重要な役割を果たされることを期待し、またその期待に十分答えられることを確信しています。



ブラジル福岡県人会 内田 シベリ

初めに

私はブラジルの首都・ブラジリア出身の日系3世で、家族は両親と兄、双子の姉の5人です。2007年にブラジリアのIESB大学国際関係学科を卒業しました。私は、日本人である祖父母たちの母国や出身地について知りたいと思い、日本語を勉強しているうちに日本文化と言葉に興味を持ち、今回の留学を希望しました。私は日系人として、今まで自分の中では、ブラジル文化よりも日本文化が多いと思っていましたが、日本へ来て自分が知らないことはまだ多くあることに気がつきました。日本へ来た当初は何もかもが珍しくて楽しかったのですが、月日が経つと自分がどのような行動を取ればいいのか分からなくなりました。しかし、日本文化と直接触れ合うことが、自分自身を認識することであり、この素晴らしい日本文化を受け入れて共有し、またとない機会を有意義に過ごさなければならないとわかりました。

本当の日本を発見

福岡の方々には外国人を歓迎してくれる人が多く、都会でもあるし、山や海やきれいな公園もあり、田舎の一面も持っています。福岡滞在中は、福岡県海外移住家族会の皆様のおかげで、様々な活動に参加することができました。田植え、稲刈り、脱穀、ブドウ狩り、ホテル狩りなど、多くの活動を通して楽しく日本文化を学ぶことができました。

福岡へ来たばかりの頃、ホームステイをする機会があり、うきは市の臼井さん宅にお世話になりました。臼井さんはとても親切で、温泉にも連れて行ってもらい、初めて日本人の本当の生活を知ることができました。

夏にあった久留米の花火大会は本当に印象に残りました。日本の花火の大きさや打ち上げ数の多さに驚き、たくさんの方がいる中で売店もあり、花火を見るために浴衣を着ている人もたくさんいて、花火大会の壮大さに感動しました。

私は、日本といえば着物を思い浮かべます。日本に来る前、一番経験したいと思っていたことは、着物を着ることです。11月に行われた着物体験で、その夢を実現させることができました。自分で綺麗な着物を選び、その着物を着たまま大濠公園で写真を撮った後、博多座で忠臣蔵を観ました。その時の気持ちは表現しがたいですが、私の夢が叶い本当に嬉しかったです。

夏休み

7月に海外福岡県人会子弟招へい行事があり、様々な国の子どもたちと引率者が参加しました。私たち留学生も彼らのサポート役として参加しました。この事業は、全参加者（子ども、引率者、留学生）にとって、新しい事を学び友達を作り、日本文化や外国文化を知るととても良い機会になったと思います。子どもたちにもこの経験を忘れないでほしいです。

この事業が終わった後、京都に住む、ブラジルで知り合った友達に会いに行きました。彼女と一緒に京都観光ができ、清水寺、金閣寺、東映太秦映画村などに行き、大文字の送り火も見ました。また、大阪に住む身元保証人に会いに行き、神戸や奈良も訪れました。夏の終わりには、沖縄を訪

れ、とても綺麗な海に感動しました。沖縄郷土村や熱帯ドリームセンターを見学し、最後の日に行った首里城公園は、すごく良かったです。

勉強の事

4月から九州産業大学国際経営学科で、経営学の研究をしています。九州産業大学では、学生たちのためにユニークな授業を組成し、社会事業研究事例、企業戦略の視点から、企業の営利性と地球規模の社会的問題解決を両立させる条件を研究しています。九州産業大学で働いている先生方は、本当に素晴らしい方たちです。

私の指導教員である土井一生教授の指導のもと、研究も進めました。私の研究テーマは、現在世界全体が直面している、経済危機や地球温暖化という問題から考え出しました。2008年の経済危機の影響を受け2009年以降、日本の市場ではいくつかの変化が見られるようになりました。企業の社会的責任の必要性を感じた多くの日本企業が、社会貢献プログラムを実施するとともに、BOP ビジネス（貧困層を支援しながら、購買力を持った消費者に変える戦略のこと）を発展途上国で開始しました。企業と貧困社会の両方に利益をだしながら、貧困や飲料水不足や不衛生などの問題を解決し、貧困層の所得を増やし、自立を進めるためのプロセスです。

BOP ビジネスの興味深い例としてあげられるのが、日本ポリグル社です。日本ポリグル社は、既にメキシコのような発展途上国に大きな利益を与えています。彼らが行っているプロジェクトは、飲料水にならない水を浄化し、飲料水とするプロジェクトです。凝集剤を水に入れるだけで水がきれいになり、誰でも簡単に利用することができます。またこの凝集剤は安価で1ドルで1トンの水を浄化することができます。日本ポリグル社は、バングラデッシュでこのプロジェクトを3年半前から行っており、既に4、5万人の役に立っています。

BOP ビジネスはブラジルの公共衛生を整えるためにも使えると思います。BOP ビジネスを行うことで、その地域で雇用が生まれ、衛生環境も向上します。ブラジルでは、1400万人もの人が公共の水道水を使えない状況にあります。多くの人が汚水を飲むことで病気にかかり、貧困地域やスラム街では水の浄化が重要課題となっています。

最後に

帰国後は日本で勉強した事を活かして仕事がしたいです。現在、世界は経済危機や地球温暖化などの問題に直面していますが、日本は地域テクノロジーと産業を利用しながら、持続可能な開発やエコタウンを作り上げているところから、世界基準となっています。それは、ブラジルのような発展途上国の環境問題に日本は良い影響を与えています。これをもとに、ブラジルで飲料水の問題について研究を進めたいと思います。また、私が住むブラジルには福岡県人会がありません。そのため、ブラジルに住む福岡県人の子弟を集めて、全員に福岡県からの情報が伝わるようにして、これからも福岡県と交流したいと思います。

お礼

はじめに、祖父母、家族、どんな時でも私を支えてくれてありがとうございます。福岡県の皆様、私たち移住者の子孫に、祖父母の故郷を知る機会を与えてくださってありがとうございます。福岡県国際交流センターとブラジル福岡県人会の皆様、このような素晴らしい経験をさせていただき、心からお礼を申し上げます。この一年間お世話になり、誠にありがとうございます。福岡県海外移

住家族会の皆様、私のたくさんの思い出作りにご協力いただき、ありがとうございます。井出 亮さんと里岡 ひろみさん、私の保証人を引受けてくれたことに感謝します。九州産業大学の土井先生、辛抱強く私に多くのことを教えて、研究のご指導をしてくださり、本当にありがとうございます。大学の国際交流センターの皆様、特に田島様のサポートはとても心強かったです。本当にありがとうございます。日本でできた友達へ、特にユウコちゃん、ヨウコちゃん、タロウさんとハルカちゃんへ、いつも助けてくれてありがとう。この一年間一緒に過ごした福岡県移住者子弟留学生の仲間であり私の大切な友達へ、楽しい時だけではなく、困難な時や私が必要な時にいつも私のそばにいてくれて、心から感謝しています。



九州産業大学経営学部 教授 土井 一生
(内田担当教員)

この度、福岡県移住者子弟留学生として、内田 シベリさんを1年間当研究室にてお預かりしました。担当教員となる私との初めての面会では、やや緊張が見られたものの、明朗快活で礼儀正しい振る舞いはたいへん好感が持て、すぐに当研究室の所属学生とも意気投合されたようです。本学では、日本語の授業を始め、「欧米ビジネス演習」といった国際ビジネスに関する演習科目に参加、日本人学生との積極的交流を通じて、プロジェクトワークに励みました。ただ、日本語運用能力については、その積極性に比して、期待していたレベルには到達できなかったようです。

他方、個人的な研究テーマとして CSR (Corporate Social Responsibility:企業の社会的責任)、とりわけ「発展途上国における多国籍企業の社会貢献活動」に取り組みました。ブラジルにおける劣悪な水事情の解決を目的に、日本ポリグル株式会社の水質浄化技術に着目、同社のビジネスを BOP (Base of the Pyramid) ビジネスとして、ブラジルへのその移転可能性についてレポートをまとめました。

短い期間ではありましたが、シベリさんが日本滞在を十二分に満喫され、研究面でも立派な成果を上げることができたことを、担当者として大変うれしく思います。「また来日して、研究をしたい」と言ってくれたことをぜひ実現して下さい。今後の活躍に期待します。Ate logo!



ブラジル福岡県人会 今村 フラヴィオ アキラ

はじめに

私は、ブラジル・サンパウロ出身の25歳、日系3世です。4年前にブラジルのサンジュダス大学経済学部を卒業しました。両親のアドバイスもあり経済学を学びました。学び始めた頃は、経済についての知識がほとんどありませんでしたが、1年後には、経済の勉強をして良かったと思えるようになりました。2005年12月に、出稼ぎのために初めて日本に来ました。その時は仕事が忙しく、日本を旅行する時間ありませんでした。しかし、日本に対してとても良い印象を持ったことを覚えています。その後、2007年にもう一度出稼ぎで来日しました。その頃、日本で勉強するための奨学金制度があることを知り、日本で勉強したいという思いが強くなりました。

福岡県で留学生として過ごしたこの1年は、九州産業大学の黄完晟教授は厳しく、日本語クラスは私にとって非常に難しかったです。出稼ぎで来日していた頃と違い、心に余裕がある日々を送ることができました。また、以前は、日本人は仕事や勉強をするためだけに生活をしていると考えていましたが、今回、長期間日本で生活できたことで、その考えを改めて楽しい日本も知ることができました。

夏休みについて

夏休み期間中は、青春18切符を使い、関西、関東のいろいろな所へ旅行しました。一人で訪れた場所もあれば、同じ福岡県移住者子弟留学生たちと旅行する機会もありました。様々なところを訪れた中でも、静岡と和歌山と愛知県に住んでいる親戚に会いに行ったことは、とても印象に残っています。愛知に住む従姉妹とは、10年振りに会ったので、従姉妹の子どもたちが大きくなっていて驚きました。

また、和歌山では祖母の従兄弟に初めて会い、とても短い時間ではありましたが、食事をしながら家族と戦争の話聞くことができました。叔父さんは「戦争時代に家族と離れてブラジルへ移住し、友達は戦いで亡くなった。だからすごく苦しい時だった」と話していました。

7月に海外福岡県人会子弟招へい事業に参加しました。事業中は、自分の生活だけではなく、子どもたちのことも考えなければなりません。各国の子どもたちは、母国語が異なっても一緒に遊び、仲良くしていることに驚きました。いろいろな活動において、私のグループの3人の子どもたちは日本の珍しい習慣に常に驚いていました。彼に「いろいろな活動の中で一番心に残ったことは何？」と質問をすると「小学校訪問」という答えが返ってきました。日本の小学生が自分たちの小学校の掃除をしたり、自ら給食の準備をしたりすることに、驚いていました。

福岡について

私は以前、関東地方に住んでいたことがあります。関東に比べて福岡県は留学生が多くて驚きました。また、駅員や店員の方々がとても優しく、困ったときはいつも誰かが助けてくれます。日本へ来る以前、日本人は恥ずかしがりやが多いのだと思っていましたが、私が福岡で会った日本人は、とても明るく暖かい心を持っている人ばかりです。私の身元保証人である関さんも、いつも元気で

明るい方です。また、福岡県海外移住家族会の松田さんも、いつも私をご自宅に招待してくれて、BBQに誘ってくれました。このような素敵な方々が近くに居てくれたので、ホームシックにかかることもなく福岡での楽しい時間を過ごすことができました。

勉強について

4月から九州産業大学で、経済と日本語の授業を受け始めました。日本語の勉強に関しては、大学では日本語の授業数があまり無く、初めは思うように勉強が進みませんでした。しかし、福岡県国際交流センターのこくさいひろばで開催されている日本語の授業に行き始めてからは、会話力と聴き取りが上達したと思います。また、日本語能力試験を受けるために、漢字や文法の勉強をしに週に2回、くもんへ通いました。ブラジルでも日本語の勉強のために、くもんへ行っていました。日本の子どもたちと同じクラスで勉強をして、とても勉強になりました。

また、中小企業というゼミに参加し、日本経済や日本の歴史について研究をしました。私にとって、経済学を日本語で学ぶことはとても難しいことです。しかし、黄教授は「経済の授業やゼミの内容が理解できなくても聞いているだけでも良いから出席しなさい」と言ってくれました。私が研究している経済は、新聞や様々な本を読む必要があり、黄教授は漢字を勉強するように指導してくれました。日本語で理解できない内容は、英語で書かれている本で補っていました。

また、広島平和記念公園も訪れ、戦争についての映画や新聞、本を見て、ブラジルで得た知識とは全く違う新しい知識を得ることができました。現在の広島は素晴らしい町で、広島に原爆が落とされたとは信じられませんでした。

帰国後の目標

帰国後は、ブラジル福岡県人会の活動をできるだけ手伝いたいと思っています。家族の中でブラジル福岡県人会に入っているのは私だけなので、家族や友達を誘い県人会を活性化させるためのサポートをしたいと思っています。最後に、ブラジル福岡県人会の皆様ありがとうございました。坂野さんや田中さんいつもお世話になっています。九州産業大学と黄教授にも心から感謝しています。そして、福岡県国際交流センターの皆様、福岡県海外移住家族会の皆様、いつも優しくしてくれて、ありがとうございました。私の身元保証人になってくれた関さん、本当にありがとうございました。福岡で出会えた皆様に、心から感謝しています。



九州産業大学経済学部 教授 黄 完晟
(今村担当教員)

今村 フラヴィオ アキラ君は、ブラジルからの留学生で、2010年4月から2011年3月まで、九州産業大学経済学部の私のところ（中小企業論及ゼミナール）に来た。今村君は、以前旅行と仕事の関係で、2回ほど日本に来た経験があり、日本の社会には、初めてではないので、ある程度慣れていた様子であった。今村君は、サッカーが好きで、ブラジルでも楽しんでいたという。しかし、日本では、それほどサッカーを楽しめなかったように見える。

今村君は、日本では日本語と日本経済を勉強して、帰国してからは学校で日系人を中心に、日本語と日本経済について教えたいという希望を持っていた。それで、日本経済のうち、最近の日本経済の展開に興味を示しつつも、研究テーマとしては「日本の戦後改革」を勉強したいということであった。しかし、社会科学の勉強ではかなりの日本語の能力が必要であるので、日本語の勉強・小学生中学生レベルの漢字の勉強に多くの時間を費やしてきたように見える。結果として日本の戦後改革の研究は十分進まなかった。

九州産業大学では、中小企業の国際比較をテーマとしているゼミナールにほぼ毎週出席して勉強してきたが、その他に「日本経済史」、「中小企業」、「地域経済論」、「日本の歴史」、「日本語」などを受講した。今村君は1年間の留学の結果、聞くという日本語能力はより上達してきたが、書く、話す、という日本語能力はさらに伸ばしてほしい。

他方、今村君は、日本に親戚がいることでさびしい日本での留學生活ではなかったように感じた。また、時間を工面して長崎、熊本、北九州市などなど、九州の主な観光地や歴史的な場所は見学したこと、さらに夏休みに東京、大阪、広島なども旅行したことは、良かったと思っている。勉強だけでなく、見聞を広げることも重要だからである。

今村君が、ブラジルに帰国後、さらに勉強をして夢をかなえることを願っている。



ブラジル福岡県人会 中村 イアラ 明美 デ アルメイダ

はじめに

私はブラジルのサンパウロ市生まれの日系4世です。曾祖父母は福岡県久留米市で生まれました。2009年にFMU私立大学の法学部を卒業しました。高校生の頃、私は多くの日系人の友達ができ、日本文化に興味を持つようになりました。ブラジルと日本は距離的にはとても遠いけれど、ブラジルでも日本文化がちゃんと生きている事に驚きました。それ以降、日本語を勉強したり和太鼓の練習をしたりして、日本文化に触れていました。

そして、ブラジル福岡県人会と福岡県国際交流センターのおかげで、2010年4月1日に日本へ来ることができました。九州大学法学部で労働法についての研究をしました。日本語で法律についての研究をすることは難しいですが、日本に来ることは私の夢だったので、諦めないで頑張りました。

日本での生活

言葉もわからず、初めての一人暮らしで、ブラジルとは何もかも異なる日本での生活は、私にとってはチャレンジでした。不安は多々ありましたが、友達と先生のおかげで日本での生活や研究は、満足できるものとなりました。

福岡に到着した日、綺麗な桜を見てとても感動しました。こんなにきれいな花を見たのは、福岡が初めてでした。祖母はいつも桜について話をしてくれていたもので、祖母の事を思い出しました。来日当初は緊張の毎日でしたが、日本人や外国人の友達ができるにつれて、生活は楽しくなり、以前は、日本人に対して冷たい印象がありましたが、日本人の友達ができ、日本人は恥ずかしがりやで優しい人たちだとわかりました。

今年度の福岡県移住者子弟留学生は全員同じ寮に住んでいて、とても仲良くなりました。以前はあまり作らなかった料理を一緒に作り、落ち込んでいる時は、皆がいつも助けてくれました。

また、留学中学校生活とは別に、福岡県国際交流センターや福岡県海外移住家族会のおかげで、たけのこ掘り、ぶどう狩り、田植え、稲刈り、花火大会、着物体験や海外福岡県人会子弟招へい事業などに参加することができ、日本の日常や日本文化を詳しく学ぶことができました。これらの活動は全て楽しかったですが、一番気に入った活動は着物体験でした。綺麗な着物を着せていただき、大濠公園の日本庭園で写真を撮った後、博多座で忠臣蔵を観劇させていただきました。忠臣蔵はとても難しかったですが、着物で一日を過ごすことができたことは、良い経験になりました。

勉強について

私は、九州大学で日本語の授業と、労働法についての研究をしました。日本語の授業では、文法のクラスを週3回、会話の授業を週2回受けていました。そのおかげで、以前に比べて理解できる漢字が増え、先生や日本人が話している会話がすんなりと耳に入ってくるようになりました。

また、私の指導教員は、九州大学法学部の野田進教授でした。野田教授はとても優しく、私に何か問題があれば、いつも助けてくれました。労働法についての研究テーマは、「日本で働いているブ

ラジル日系人の労働法について」でした。最近日本で働いている日系人が増加していると共に、労働の損害賠償も増えているため、このテーマを選びました。現在のブラジルは、労働賃金が安く雇用機会も少ないので、ブラジル日系人も生活が苦しい人たちがとても多いです。日本とブラジル間には協定があり、ブラジル日系人は日本で働くことができるので、ブラジルで仕事がない日系人は、日本へ来て働いている人も多いです。しかし、その日系人の多くは、日本の労働法をあまり知らずに日本へ働きに来るため、仕事先でトラブルに合うことも多々あります。

多くの日系ブラジル人労働者が日本で働く場合、直接日本企業から採用してもらうのではなく、派遣業者を通して採用されることが多いです。派遣業者を通しての就労は、退職金が発生しない場合がほとんどのため、今の日本のように経済が安定しない状態が続くと、日系ブラジル人は解雇されやすくなります。ブラジルへ帰ることもできず、日本で失業者として苦しい生活を強いられて困っている日系ブラジル人がたくさんいます。その人たちのためにも、ブラジルへ戻ったら、彼らのサポートや指導をする仕事に就きたいと思っています。

夏休み

日本での夏休みは最高でした。7月の初めは、海外福岡県人会子弟招へい事業に参加しました。福岡県移住者子弟留学生は全員で、海外福岡県人会の子どもたちと引率者のサポートをしました。私はアメリカとハワイ島からの参加者の手伝をしたので、日本語と英語を使って通訳しなければなりませんでしたが、難しかったです。友達がたくさん作ることができ、良い勉強になりました。

子どもたちも、大島小学校や平尾小学校へ行き、日本の子どもたちと交流ができて素晴らしい経験をしました。言葉の壁があっても、交流ができたことに驚きました。この事業を通して、子どもたちは日本語と日本文化に更に興味を持ったと思います。そして、国に帰り、自分たちの友達に学んだことを教えていると思います。日本文化を世界に広めることが私の夢なので、この事業に参加できたことをとても感謝しています。

また、夏休みには旅行もしました。大阪、広島、神戸、奈良、京都などを訪れ、町を散策したり、お寺、博物館や神社などを見学したりすることができ、旅行も日本文化の勉強になりました。東大寺では素晴らしい大仏殿を見ることができました。大仏殿を見ることは私の夢だったので、感動して泣きそうになりました。そして、ブラジルの日本語学校の先生が、以前、金閣寺の写真を見せてくれたことがあり、金閣寺を訪れ自分の目で見ることができたときは、とても嬉しかったです。

最後に

この一年間で、多くのことを経験して知識を増やすことができました。帰国後は、弁護士になり、日本で学んだことを生かして、日本で働きたい日系ブラジル人たちのサポートをしたいと思っています。そして、日本語を忘れないためにも、日本語の勉強をし続けたいです。また、ブラジル福岡県人会で行われる日本祭りや運動会、青年会の会議などにも参加し、県人会の活性化のために役に立ちたいです。そして、未来の留学生たちに、私が経験したことを話すことで彼らのサポートができればと思っています。

今回、私に日本へ来る機会を与えてくださった、ブラジル福岡県人会と福岡県国際交流センターと福岡県海外移住家族会、そして福岡県の皆様には本当に感謝しています。ありがとうございました。そして、身元保証人の北原さん、いろいろとお世話いただき、どうもありがとうございました。



中村イアラさんが、2010年4月に私の研究室に来たときは、少し心配そうな硬い表情でした。彼女は、サンパウロで法学の勉強をしていたので、日本で法律学を勉強することに苦労はないように見えるかもしれません。ところが、法律学は、同じ社会科学でも、経済学や社会学と異なり、ドメスティックな学問分野です。他の社会学分野のように、数的分析をしたり、実態調査をしたりすることはなく、法律学の主な研究対象は、法令や判例など、その国の文章・言葉そのものです。そのため、法律学の留学生の最大の課題は、いつも「言葉との格闘」ということになります。イアラさんも、毎回予習が義務づけられる、数十頁の判例を予習するのは大変な苦労だったと思います。心配そうな表情になるのは無理もありません。

彼女が参加しているゼミナールは、20人あまりの学生が参加していて、今年は、労働法、特に労働契約に関する新しい判決を読んでいます。グループまたは単独で、判例を整理・分析して、報告し、全員で討論しています。イアラさんの場合は、1年の期間しかないことからテーマを選定して、日本の外国人研修、技能実習制度についての判例を調査してもらっています。1月末にゼミで報告してもらったことは、大きな成果でした。

イアラさんは、ゼミナールでは、最初は日本での判例の勉強に苦労していましたが、だんだん表情が明るくなり、今では発言もできるようになりました。

彼女はブラジルで雪を見たことがないというので、ゼミナールの旅行では、1月にみんなでスキーに行きました。日本の法律や外国人研修制度の研究とともに、スキーと友情という思い出を心のトランクに詰め込んでいただきたいと思います。



在ボリビア福岡県人会 緒方 ディアナ おさえ

はじめに

私は26歳の日系3世で、ボリビアのサンタクルス市サンファン移住地で生まれ、6歳のころ移住地を出てコチャバンバに引っ越しました。サンファン移住地は、日本から移住した人たちが住んでいます。日本人が移住して、今年で53年になります。

私は2008年に カトリカ・ボリビアナ大学のコマーシャル・エンジニアリング学部を卒業した後、1年間サンタクルスの仲松建設会社で金融管理の仕事をしていました。

私の祖父母は福岡県生まれです。祖父（緒方 莞爾）は、飯塚市桂川町で生まれ、1957年にボリビアに移住しました。何もないサンファン移住地で少しずつ頑張っ生活し69歳で亡くなりました。先日、祖父が生まれた桂川町へ行ってきました。私の保証人（小林カズエさん）が住んでいる所なので遊びに呼ばれて行きました。思ったよりも田舎でした。人や道路、学校などはサンファンに似ており、人々は温かかったです。

日本には4月4日に到着しました。初めての一人暮らしで、初めは緊張していましたが、私と同じ福岡県移住者子弟留学生たちが同じ寮に住んでいたことと、大学が寮から近かったことで、次第に新しい生活に慣れました。

温かい休み

7月に、海外福岡県人会子弟招へい事業の手伝いをしました。今回はボリビアからの参加者がいなかったのは残念でしたが、いろいろな国の子どもたちに出会えて、彼らと一緒に過ごした時間が楽しく、一日が過ぎるのが早く感じました。私のグループはアルゼンチンとコロンビアの子どもたちで、従順で明るく面白く、何も手がかからない子どもたちでした。この事業で福岡の様々な場所を訪れることができた上に、他国の福岡県人会の人たちと知り合うことができ、良い思い出になりました。

また、8月は日本に住んでいる親戚たちに会いました。静岡では、従姉妹に会いました。1歳の子どもがいて、とても可愛い姪です。静岡には2日間滞在し、その後、埼玉の叔父（父の弟）と9年ぶりに会いました。叔父は横浜に住む私の弟と一緒に、東京タワーや横浜に連れて行ってくれました。また、横浜では父の従兄弟に会うことができ、一緒に江ノ島へ行きました。8月20日は祖父（母の父）の命日で、日本に住んでいる親戚が叔母（母の妹）の家に集まりました。皆で一年前に亡くなった祖父を思い出して、懐かしい話をたくさんすることができました。

勉強について

「マーケティングは、商品とサービスを売って、利益を生むことです。」

山本久義先生が九州産業大学での私の指導教員でした。とても優しく面白い先生です。授業は難しいので、分からない言葉がたくさんありました。しかし、先生は優しいので、英語や日本語の簡単な言葉で説明をしてくれます。

私にとって日本のマーケティングを研究することは、とても勉強になりました。日本ではマーケティングがたくさん使われています。福岡、東京、横浜、静岡や埼玉に行きましたが、どのお店に入っても親切に売りながら、笑顔でお客様を大切にしていたことがボリビアと全く違うところです。ボリビアの大学ではマーケティングの勉強をしましたが、日本のお店のほうがマーケティングをうまく使っています。

マーケティングでは、お客はただ買うだけの人ではなくて、お店のファンになってもらうために一生懸命お客様に満足していただく方法を見つける「顧客志向」という方法を学びました。顧客志向はお客様が気がつかないサービスで、お客様の心を動かす事です。それで、心を動かすとお客様の満足度が高くなるので、このお客様が「熱烈なファン」になって、クチコミの始まりになります。

クチコミはパブリシティの中でお客様が一番信用する宣伝方法だと私は思います。クチコミは自分が経験したことを教えることで他の人が信用をして、買うか、買わないかを決めます。

マーケティングという言葉はボリビアや日本でも同じ意味ですが、文化によって内容が違います。経済が発達している国のマーケティングは凄いなと思います。管理人も売る人もお客様もマーケティングの正しい方法が分かっているので、お店はどんな製品を売るときでも、簡単に様々なマーケティングを適用することができます。たとえば、日本の有名な「うまかつちゃん」ラーメンを売る会社は、部分市場（Segmentation）を狙い、場所によって、麺のかたさや具やスープの味を変え、お客様を満足させるためにラーメンを作ります。たとえば、九州のラーメンはとんこつ味で麺が硬いですが、大阪のラーメンは醤油味にやわらかい麺を食べる人が多いです。部分市場で出来ることは、お客様の嗜好を調べて商品とサービスを売る事です。日本のお店に入ることで、売る人が商品についてお客様のことを良く考えていることがわかりました。

文化が違うので、日本で見たマーケティングは、ボリビアでは簡単に出来ませんが、私にとって大切な学びでした。

伝えたい事

留学した1年間は、勉強だけではなく、祖父母の故郷や日本文化を深く知るための日々でもありました。

在ボリビア福岡県人会の皆様や身元保証人になってくださった、小林カズエさんのおかげで、祖父母の故郷で一年間を過ごす事ができ、本当に感謝しています。

また、福岡県国際交流センターと福岡県海外移住家族会の皆様のおかげで、様々な活動に参加でき、日本文化を学ぶこともできました。多くの人にお世話になり、楽しい経験ができたことを心から感謝しています。竹の子掘り、ホームステイ、田植えと稲刈り、花火大会や着物着付けやBBQなどは、大切な思い出になりました。特に山崎さん宅でのホームステイで、とても優しいご夫婦と一緒に過ごした日のことは一生忘れません。

九州産業大学の国際交流センターの皆様にも大変お世話になりました。また、山本先生にもたくさん「ありがとう」と言いたいです。先生の優しさと忍耐のおかげで大学の授業に行きやすく、日本のマーケティングを学ぶことができました。

そして、この1年間、ずっと一緒に居てくれた同じ留学生の6人の仲間がいました。彼らにも心から感謝しています。たくさん大切な思い出を心に、皆の幸せを願っています。皆様、本当にお世話になりました。ありがとうございました。



九州産業大学商学部 教授 山本 久義
(緒方担当教員)

緒方 ディアナ おさえさんは2010年4月、南米のボリビアからはるばる福岡市の九州産業大学に研究生として留学してきました。ボリビアの大学で「商業工学」を学び、さらに日本式のマーケティングについて学びたいという希望を汲み、本学・商学部の計らいで、山本研究室で勉強することになりました。

前期後期とも、大学院レベルを含む週8科目程度、私の授業に参加し、それとは別に日本語の授業を1科目というかなりハードなスケジュールです。私は、ゼミでも講義でも、彼女を必ず前列中央の指定席を用意し、時々質問をぶつけるという形で、理解の促進に努めてまいりました。もともと頭の良い娘なので、彼女の希望している「日本式のマーケティング」の知識が相当、身についたと思われます。日本語にもかなり慣れてきました。根が真面目で陽気な性格ですので、大学生活と授業にもすぐに慣れ、打ち解けた雰囲気は漂う素敵な日本の女子学生の一人になりました。

学部の「教養講座（地域振興戦略論）」ではチャーターバスによる農山村の現地視察旅行が恒例になっており、私の引率の下で、当科目受講生の中の彼女を含む約30名がこれに参加しました。日田市（サッポロビール工場見学）、日田市大山町（木の花ガルテン訪問・農産物のショッピングと食事）、九重町（日本一の大つり橋の渡橋体験つき）、由布院町（九州の軽井沢）での視察体験を行ったのです。皆大喜びで、なかには毎月やりたいという学生が大勢いました。もちろん彼女も大喜びでした。日本の農山地域とそこでの農業や林業、地域観光業と、地域振興を目的とするマーケティング戦略の現場を目の当たりにし、彼女にとって地域振興に対するマーケティング戦略のあり方について大きなヒントが得られたことと思います。

できたら来年度、私が所属している大学院経済・ビジネス研究科に進学していただき、私の指導の下で、マーケティング戦略を中心とする修士号を提供したいと考えております。



ペルー福岡クラブ 真壁 川原 ヘラルド 幹夫

はじめに

私はペルー・リマ市出身の日系4世で、昭和61年に生まれました。父方の祖母は福岡県に生まれました。また、父方の曾祖父は宮城県から、母方の曾祖父は大分県と宮城県からペルーへ移住しました。子どもの頃から日本で生活をしたいと思い、平成21年までに3度来日しました。しかし、その時は、親戚に会うことと観光が目的だったので、滞在期間が短かったです。

私は平成21年7月にペルーのパシフィコ大学経済学部を卒業して、ペルーの日産自動車株式会社で働いていました。私は将来、アメリカの大学院で学び、アメリカの有名企業で仕事をしたいと思っていましたが、日本で暮らしたいという思いを忘れられずに、アメリカではなく日本への留学を考え始めました。日本で生活をしながら、経済学の勉強をすることができる福岡県移住者子弟留学生受入事業は、私にとって素晴らしい機会となりました。

福岡での生活

福岡市は、地方都市の静かな雰囲気を持ちながら、極めて都会的な側面も持つ町です。福岡で住んでいた寮の周りには、日常生活に必要なものが全てあり、福岡の公共交通機関はとても良く整備されていて、福岡市での移動は、非常に便利です。一人暮らしをするのは初めてだったにもかかわらず、すぐに福岡での生活に慣れる事ができました。

毎日の食事は、私の生活には重要な要素の1つです。カレーライス、味噌汁、うどん、餃子、牛丼などを食べるのが、私の習慣になっていきました。福岡に来る前から日本料理のことは知っていましたが、博多ラーメンのことは聞いたことがありませんでした。しかし、私は、すぐに博多ラーメンが好物になり、1週間に1回以上食べていました。

また、福岡県国際交流センターと福岡県海外移住家族会の方々のおかげで、様々な活動に参加することができました。日本でしかできない活動も多く、これらの機会は私にとって素晴らしい印象を与えてくれました。例えば、田植え、稲刈り、脱穀、竹の子掘りなどの活動で、私の先祖たちがやっていたであろう仕事と同じ体験をすることができました。家族会の山下さんのお宅でのホームステイと着物体験では、日本の伝統文化や習慣を経験しました。また、家族会の方々には、常にバーベキューや晩御飯に誘ってくれたり、花火大会、ぶどう狩り、コンサート、蛍狩りなどの活動に招待してくれて、素晴らしい思い出がたくさんできました。

スポーツは私の大好きなことです。福岡ソフトバンクホークスのファンになり、ヤフードームへ2回行き、彼らのペナントレースのサポーターをしていました。残念ながら、ソフトバンクは日本シリーズに出ることができませんでした。同様に、私は相撲本場所を非常に期待していました。待望のそのイベントでモンゴルの白鵬の取組を見ることができ、忘れ難い印象を受けました。やはり、いつものように横綱の白鵬の勝ちでした。

さらに、九州産業大学のテニスサークルに入りました。3歳年下の学生を「先輩」と呼ぶことが不思議な感じでしたが、テニスをしながら、日本の友達を作って、日本の部活の制度を学ぶことができました。

日本の夏休み！

7月に、海外福岡県人会子弟招へい事業が行われました。私は、ペルーとメキシコから参加した子どもたちの世話をし、彼らと一緒に日本と福岡について、いろいろなことを学びながら楽しい期間を過ごしました。この事業のおかげで、子どもたちと福岡の間に強い関係が生まれ、日本語への興味が大きくなり、将来私のように福岡県移住者子弟留学生として日本で勉強をしたいと思う子どもたちも増えると思います。

8月上旬に、夏休み旅行へ出かけました。初めに、愛知県に住んでいる従姉の家で、来日していた両親と会い、また、何年か振りに親戚にも会うことができました。両親が帰国した後は、関西へ行き、大阪、神戸、奈良を観光しました。日本は他国に比べて小さい国ですが、おもしろい所が数多くあります。例えば、大阪の海遊館、大阪城、奈良の東大寺、たくさんの鹿がいる奈良公園など、興味のある場所を訪問しました。

研究について

ペルーは、間もなく日本と自由貿易協定を締結する予定です。そのため両国間のビジネスチャンスはますます増えるでしょう。しかし、文化の違いや言葉の障壁が、二国間貿易やビジネスの可能性を妨げ、困難にしています。このような状況下で、ペルーだけでなく日本の企業やビジネス戦略を習熟し、掘り下げて研究することは必要不可欠なことです。

私は、ペルーの大学でビジネスに関する教育を受けました。また実社会での就業経験があるので、企業環境に関する知識は豊富です。ところが、日本経済の現実や、ビジネス界の常識などの点で分からないことが多くありました。ペルーと日本、双方のために働き、日本の企業と取引を行うためには、これらの知識を学ぶことが私には不可欠なことです。

日本の経済や産業界の常識を学ぶため、九州産業大学で経済学部と経営学部の講義を受講しました。ビジネスの講義では、日本語と英語を使いながらケーススタディーを行いました。更に1週間に1回、私の担当教授である経済学部の岡本哲史教授とミーティングを行いました。毎週のミーティングでは、日本経済とペルー経済の差、日本の大企業、日本の景気の将来などの話をしました。

また、理論的な研究だけでなく、実務についての研修も行いました。一つは、私の夏休み中に父が仕事で来日した際に、彼が三菱鉛筆の本部で参加したビジネス会議に、同席させてもらいました。また、日産自動車株式会社の九州工場の見学にも行きました。

お疲れ様でした！

この留学中に、日本経済や日本のビジネス界に関して私が経験したことや得た知識は、とても有益なもので、私のキャリアも成長し、ペルーに投資したいと考えている日本企業と、日本へ製品輸出をしたいと考えているペルー企業との橋渡し役としての能力が、増したと感じています。そして、この一年間の間に得た知識や、経験した事は、世界中のどのプログラムや、どこの場所でも、経験できなかったと思います。この国に住んでいる人にしか分からない、日本のもう一つの顔を知ることができて、いろいろな国籍の人達と出会い、友達になった事、全部含めて私はとても恵まれていると思います。そして、福岡へ来る機会を私に与えてくれた福岡県、福岡県国際交流センター、福岡県海外移住家族会、ペルー福岡クラブの皆様にも心から感謝しています。また、九州産業大学の岡本先生、貴重な時間を私のために割いて、日本語と経済学の勉強においてサポートしていただきありがとうございました。私の身元保証人の吉永正義さんとそのご家族には、何度もご自宅にご招待

していただき、私を家族の一員のように接してくれたことをとても感謝しています。将来、私がどこへ住んでいても、どのような仕事についていても、九州産業大学の生徒として過ごした福岡での一年は一生忘れません。



九州産業大学経済学部 教授 岡本 哲史
(真壁担当教員)

真壁ヘラルド幹夫君は、ペルーからの留学生で、経済学部の研究生として2010年4月より本学で受け入れています。真壁君とはそれまで直接の面識はありませんでしたが、福岡県国際交流センターから本学に受け入れ打診があり、私が偶然ラテン・アメリカ経済の専門家であったという縁から、私の研究室で面倒を見ることになった次第です。

私はこれまでに合計3年ほど南米で暮らしましたが、日系人との付き合いは真壁君が初めてです。真壁君を指導してつくづく思うのは、日系人の方々は我々日本人以上に、日本文化や伝統をきちんと子弟に伝え、育てているなあという思いです。日系の方々は、ペルーに限らず移住先で様々な困難に直面した歴史を持っていますが、そのような困難にもかかわらず、日本との関わりを失わず、失われつつある日本の美德をきちんと子孫に伝えているその努力に、本当に頭の下がる思いです。

ラテン・アメリカの人々は普通、時間にルーズで奔放な人が多いのですが、真壁君は、日本の学生以上に礼儀正しく、時間も分単位で守ります。課せられた課題も毎回きちんと果たし、週1回の演習でも理路整然と自分の考えを述べます。英語力もすばらしいので、グローバル企業への就職も十分可能でしょう。真壁君の将来の希望は、世界を股にかけて活躍できるような企業家になることのようにですが、その可能性も十分あると思います。日本滞在中に、日本の様々な企業ビジネスを実地で観察し、将来、起業する上での参考にしてもらいたいと思います。

21世紀に経済が急成長するのは、日本のような老いた国ではなく、ラテン・アメリカやアジア、アフリカの若い新興国だと思います。新興国には思いがけないビジネスチャンスが、そこら辺りにごろごろしているでしょう。今回の日本留学で学んだことを生かして、真壁君が将来ペルー経済を代表するような企業家になることを期待します。頑張ってください。